

機関番号：15401
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2008 ～ 2010
 課題番号：20530776
 研究課題名（和文） ボーダーフリー大学における大学生の学習行動に関する社会学的研究
 研究課題名（英文） The Sociological Study on the Learning Activities of Borderless University Students in Japan
 研究代表者
 山田 浩之（YAMADA HIROYUKI）
 広島大学・大学院教育学研究科・准教授
 研究者番号：60258324

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的はボーダーフリー大学に在学する学生の実態を調査することで学生の学習行動、および生活実態を明らかにし、今後の学生指導のあり方を指摘することである。分析の結果、ボーダーフリー大学の学生の学習意欲はむしろ地方の中堅国立大学よりも高いが、実際の学習行動は、必ずしも意欲の高さを反映してものとはなっていなかったことなどを明らかにした。このことは大学の学習指導が表面的な意欲の面では効果をもたらしても、実質的な学習には結びついていないことを示唆する。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this research project is to clarify the situation of students who learn at the borderless universities in Japan and their university lives, and to examine the effectiveness of the guidance by universities. The results are as follows. 1) The aspiration for study of students at borderless universities is higher than those at regional national universities. 2) However, actual learning activities of students at borderless universities never reflect their aspirations and they are not diligent in their study at universities. 3) These results show that the effects of guidance by universities to students are limited and superficial and never make their students study seriously.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：教育社会学

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

キーワード：高等教育 大学生 ボーダーフリー大学 学生指導 学生文化

1. 研究開始当初の背景

大学のユニバーサル化によって多様な学生が大学に進学し、現在の学生像は既存の枠組みでは捉えられなくなっている。また1990

年代終わりからの急激な大学改革により、学生や社会のニーズに応じた制度、カリキュラムや授業が求められるようになってきている。このような状況を背景にして、90年代以降、数多くの学生調査が行われてきた。とくに武内

清らは、20 大学以上を対象にした調査を継続的に行い、現在の学生像を明らかにしてきた（たとえば、武内清編『キャンパスの生態誌』玉川大学出版部、2003 年）。また、秦らも同様の関心によって学生調査を行っている（大阪大学大学院人間科学研究科教育技術開発学研究室編『大学生にとって、いま「大学」とは？』（「大学生の生活意識に関する調査」報告書）、2004 年）。さらに、申請者もとくに資格取得など近年の学生の学習行動に着目した研究を行ってきた（藤井・山田編『地方都市における学生文化の形成過程』松山大学地域研究センター所報、2005 年、山田・葛城編『現代大学生の学習行動』広島大学高等教育研究センター、2007 年）。

しかしながら、これまでの調査の多くは、多様な大学の学生を総体的にとらえ、それを現在の学生像として提出してきた。つまり、研究大学の学生も底辺大学の学生も一まとめにして、学生像が語られてきたのである。ところが、申請者らの調査によれば、実際の学生の行動や意識は、大学によって、とくに大学の社会的位置づけによって大きく異なっていた。なかでもボーダーフリー大学と呼ばれる底辺大学では、学習行動も生活も従来の学生像とは大きくかけ離れた学生が入学している。そのため、ノートのとり方など基本的な学習習慣の指導から、言葉遣いや服装など生活習慣の指導などに大きな比重が裂かれるようになってきている。すなわち、大学が文字通り「学校化」し、かつての底辺高校で求められた「生徒指導」に近いものが求められるようになってきている。このようにボーダーフリー大学では、これまでの大学では考えられなかった教育・指導方法を採用するようになってきている。しかしながら、現在の大学研究、また大学改革の多くは、いわゆる研究大学を対象としており、ボーダーフリー大学の現状に対応した方策は十分に検討されていない。

そこで本研究では、調査対象をボーダーフリー大学に絞り、その学生の学習行動と生活実態を明らかにすることとした。

2. 研究の目的

本研究の目的はボーダーフリー大学、いわゆる底辺大学と呼ばれる大学に在学する学生の実態を調査することで学生の学習行動、および生活実態を明らかにし、さらにはその結果をもとにボーダーフリー大学における今後の学生指導のあり方を示唆することである。

大学のユニバーサル化、さらには大学全入時代の到来にともない、従来の学生像とは大きく異なる学生が大学に入学しているとされる。なかでも大学の底辺を支えるボーダーフリー大学には研究大学や中堅私立大学と

は大きく異なる学生が入学し、また大学は学習指導や生徒指導のため、さまざまな努力を強いられている。しかしながら、その実態を調査する研究は、これまでほとんどなされていない。そこで本研究ではボーダーフリー大学を対象とした調査を行い、ユニバーサル化の中で揺らぐ大学像の再検討を行う。

3. 研究の方法

本研究では、ボーダーフリー大学の学生の学習行動と大学生活の実態を明らかにするため、主に以下の3点について調査を行った。

1) ボーダーフリー大学における学生の学習行動・生活実態

ボーダーフリー大学の学生について、入学の動機、学習行動の実際、サークルやアルバイト、サブカルチャー、卒業後の進路希望など学生生活の総体についてアンケート調査を行った。この調査は、ボーダーフリー大学のみでなく、比較対象となる中堅の私立大学や国立大学でも行い、その結果を比較することで、ボーダーフリー大学学生の学習行動の実態と特徴を明らかにした。

2) ボーダーフリー大学における学生の大学観・就職観

学生の実態を明らかにした上で、ボーダーフリー大学の学生が大学という機関をどのようにとらえているのか、また自身のキャリアや卒業後の就職との関連で大学の4年間をいかに位置づけているのかを明らかにした。この調査では実際にボーダーフリー大学を訪問し、インテンシブなインタビューにより行うことで学生の学習行動とその背景を検討した。

3) ボーダーフリー大学における大学による学習指導・学生指導

学生への調査とともに、ボーダーフリー大学の教職員に対しても調査を行う。ボーダーフリー大学では教職員も自身の経験した大学とは大きく異なる学生の行動や意識に大きなとまどいを感じている。また多くの大学では、資格取得の奨励や厳しい学生指導などにより学生の規律を徹底し、就職の支援を行おうとしている。その実態を明らかにすることで、ボーダーフリー大学における学生像と今後の教育・指導の可能性を明らかにした。この調査では個別大学の実態調査とともに、教職員に対するインタビューを行った。

4. 研究成果

1) 学習意識と学習行動

以上の研究計画にもとづき、ボーダーフリー大学4校（A大学、B大学、C大学、D大学）、中堅私立大学1校（E大学）、地方国立大学3校（F大学、G大学、H大学）でアン

ケート調査を行った。また、それとともにボーダーフリー大学の学生や教職員を対象にインタビュー調査を実施した。

以上の調査結果として、とくに学生の学習への意識と学習行動について見てみよう。

大学の授業について、「授業はできるだけ休まないようにしている」と聞いた回答では、国立大の学生に「あてはまる」の者が多くなっており、授業への出席では、国立大の方がまじめであることがわかる。

しかし、大学別の値を見ると、たんに国立大の学生がまじめでボーダーフリー大学の学生が出席していないとは言えないことがわかる。私立B大学とC大学の値はいずれも80%を越えている。つまり、この2つの大学では国立大以上の者が授業にまじめに出席していると回答している。ボーダーフリー大学の中で、大学により授業への意識が大きく異なっていることがわかる。

「授業中に私語をすることが多い」の結果では、もっとも「あてはまる」の割合が高い、すなわち私語が多いのは国立大学である。ボーダーフリー大学の学生は国立大学の学生よりも受講態度は良いことになる。とはいえ、ここでも個別大学の違いは大きい。私立B大学の値は43.0%であり、群を抜いて私語をする者が多いことがわかってきた。

「きちんとノートを取りながら授業を聞いている」ではボーダーフリー大学の学生に「あてはまる」とした者の割合が60.5%とわずかに低くなっていた。国立大学の学生の方が授業中によくノートをとっていることがわかる。

しかし、大学による差は非常に大きなものであった。私立B大学、C大学は、それぞれ72.8%、69.8%が「あてはまる」と回答しており、これは国立大学よりも高いものであった。

「授業中によく居眠りをする」ではボーダーフリー大学の学生が45.5%と、もっとも「あてはまる」とする者が少なくなっていた。もっと多かったのは私立中堅大学の59.2%であった。

また、ここでも大学別の違いは大きい。私立B大学とD大学では、それぞれ33.1%、36.4%が居眠りをするのに「あてはまる」としているにすぎない。その一方で私立A大学は52.0%が「あてはまる」としており、非常に高い値であった。

同じように、「授業中に私語をすることが多い」「授業中、授業に関係のない本を読んだり、他の勉強をしたりすることが多い」「授業中に携帯電話でメールの読み書きをする」の回答で、ボーダーフリー大学の学生で「あてはまる」とする者の割合は、国立大学の学生を下回っていた。以上のように、ボーダーフリー大学の学生は、学習意識が高く、授業

の受講態度は、非常にまじめなものだということがわかってきた。

ただし、こうした受講状況はボーダーフリー大学の学生が、高校時代と同じように授業を受けていることを示しているのかもしれない。つまり、ボーダーフリー大学では、他の大学よりも学校化が進み、指定された授業を履修し、それをまじめに受講するという態度が定着していると考えられることもできる。

さらに、こうした状況を進めているのは、各大学の取り組み、すなわち学生指導にあるのかもしれない。

大学別の結果に見られるように、一概にボーダーフリー大学とカテゴリー化できず、個別の大学で大きな差があることがわかる。こうした違いは、各大学の取り組みが学生の学習意識を高めた結果であろう。つまり、先にあげた例のように、大学が組織として、また個々の教員が学生の受講態度などに対する綿密な指導を行った結果と考えられる。それゆえ、とくに受講態度で高い値を示すボーダーフリー大学があったのだろう。しかし、その一方で、それが受講態度を受動的にさせるため、必ずしも授業への期待は高くはない。実際に、上と同様に「大学の授業では専門的知識を得られると思う」や「授業で考え方が変化したことがある」という問いでは、ボーダーフリー大学の学生で「あてはまる」と回答した者の割合は低くなっていた。

それでは、こうした学習意識は、実際の学習行動にどの程度反映されているのだろうか。実際にどの程度、ボーダーフリー大学の学生が勉強しているのかを見ておこう。

学習時間の平均値を、学期中と休暇中についてみるとボーダーフリー大学の学生は、「授業・実験の課題、準備・復習」「授業とは関係のない学習」といった学習面での時間が低くなっている。また、「サークル・クラブ活動」の時間も、もっとも低いものであった。

こうした傾向は、休暇中にさらに顕著になる。休暇中を見ると「学習」と「サークル・クラブ活動」の時間がいずれもボーダーフリー大学の学生は短くなっている。つまり、ボーダーフリー大学の学生は、学習意識は高くとも、授業外では勉強せず、またサークルやクラブの活動にもそれほど熱心ではないということになる。とくにサークルなどに費やす時間が短いということは、大学ではなく、それ以外の場所に生活の中心があることを示していることがわかる。

2) ボーダーフリー大学研究の意義

以上のように、ボーダーフリー大学の学生は、学習意識は高くとも、授業への期待は低く、また授業外ではあまり勉強していなかった。その一方で、国立大学の学生は、受講態

度は「まじめ」とは言い難いものの、授業外でも専門書などを読み、自身で学習をするとともに、サークルなどにより大学中心の生活をしていると言える。つまり、ボーダーフリー大で学校化が強まっている一方で、地方国立大学では、まだ伝統的な学生生活の余韻が残っていると言える。

このように、現在の大学は学生文化も、また大学内での実際の行為も明確に分化している。それでは、このように分化した大学をいかに捉えるべきだろうか。

第1に、分化した大学を分析するための枠組みを検討する必要がある。つまり、大学を一つの機関として一元的に捉えるのではなく、とくにボーダーフリー大学を分析するためには独自の枠組みが必要とされる。

先にも述べたように、これまで、大学は一元的に捉えられてきた。大学を一元的に捉える視点は、トロウの言う、大学の発展段階、すなわちエリート、マス、ユニバーサルの3段階の受け取られ方によくあらわれている。大学は、この発展段階にしたがって、均質に機能を変容させると捉えられてきた。つまり、大学全体が時代に応じて一様に変化し、またその制度も進学率の上昇ともなって改革されなければならないとされてきた。

しかし、現実には、大学の大量化ともなっていて、別の機能を持った大学が付加されたにすぎなかった。すなわち、エリート大学は、現在も研究大学として残存し、その機能を果たすことが求められている。その一方で、ユニバーサル化によって変化を求められたのは、ここで示したボーダーフリー大学であったと考えられよう。

3) 「学校化」するボーダーフリー大学

本研究の分析を通じて明らかになったのは、ボーダーフリー大学の学生は、大学の授業に対する評価は高く、また良い成績を取ろうとしていることである。いわば、大学の授業を「まじめ」に受講しようとしている。これは先行研究が明らかにしてきた、現在の大学生の「まじめ」な意識に共通するものである。つまり、本研究の結果が示すのはボーダーフリー大学の学生の「学校化」である。

ここでいう「学校化」は、まさにイリイチが指摘したものである。イリイチは社会の学校化により、「生徒は教授されることと学習することを混同するようになる」（イリイチ）としている。つまり、学校化によって、主体的な学習が失われ、受動的に教授されることを当然と考えるようになる。こうしたイリイチの言う「学校化」は、大学の変化にとどまらず、社会全体の変化を示すものであるが、大学は、こうした「学校化」が明確に表れ、また学生のみならず社会からも「学校化」することが求められているのかもしれない。

すなわち、大学は学生が主体的に学習する場ではなく、大学が学生を教授し、学生はそれを受容する場となっている。

したがって、こうした学校化によってもたらされた「まじめ」な意識は、必ずしも実際の受講態度には反映されない。大学の授業を高く評価している卒業後に教員や大学院への進学を志望する者でさえ、受講態度は決して良いものではなかった。つまり、大学の授業を信頼し、高く評価しているからといって、「まじめ」に授業を受けるわけではない。

こうした状況は大学の学校化が進むことで、大学の授業の履修が形骸化し、出席さえしていれば受講態度はどのようなものでも良いという大学生の意識によるものと考えられないだろうか。すなわち、現在の学校化は、たんに「学習から教授への転換」にとどまらず、大学の教育活動の形骸化をもたらしている。そこでは、授業には出席しさえすれば、受講態度にかかわらず一定の知識が得られると信じられている。授業中に居眠りをし、携帯電話でメールの読み書きをしても、一定時間、座っていれば、それに対応した成果があがると考えられているのではないか。

このように現在の大学生の意識を考えれば、近年、時折見られるようになった、iPodなどの携帯音楽プレーヤーを聞きながら授業を受ける学生の存在も理解できる。そうした学生たちは、教員の話ではなく、音楽を聴いていても、一定時間を教室内で過ごすことで単位という成果を得ることができるのである。

こうした学生の意識は、現在の大学教育、および大学の授業の本質的な転換を迫るものである。だが、ここで指摘した学生の意識は、本稿の分析から導かれた仮説に過ぎず、今回の調査結果では、さらなる詳細な検討は難しい。今後、さらに質的調査なども加えて多角的に分析する必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- 1 山田浩之「ボーダレス・ユニバーシティ 研究の現状と課題」中国四国教育学会編『教育学研究紀要』(CDROM版)第56巻、2011年、262-267頁(査読無)。
- 2 藤本佳奈「地方私立大学生の就職活動—就職支援・キャリア支援との関わりを中心に—」中国四国教育学会『教育学研究紀要』(CD-ROM版)第56巻、2011年、256-261頁(査読無)。

- 3 藤本佳奈「大学におけるキャリア支援の現状と課題—私立 E 大学を事例として」中国四国教育学会『教育学研究紀要』(CD-ROM 版) 第 55 巻、2010 年、278-283 頁 (査読無)。
- 4 山田浩之「地方大学における学生の学習行動と学習意識」『比治山高等教育研究』第 3 号、2010 年、37-48 頁 (査読無)。
- 5 山田浩之「ボーダーフリー大学における学生調査の意義と課題」『広島大学大学院教育学研究紀要第 3 部』第 58 号、2009 年、27-35 頁 (査読無)。
- 6 藤本佳奈「地方私立大学生の就職意識に関する調査」『広島大学大学院教育学研究紀要第 3 部』第 58 号、2009 年、117-124 頁 (査読無)。

(2) 研究分担者 ()

研究者番号 :

(3) 連携研究者 ()

研究者番号 :

(4) 研究協力者
藤本 佳奈 (FUJIMOTO KANA)
香川大学・学生支援機構・助教

[学会発表] (計 6 件)

- 1 山田浩之「ボーダーレス・ユニバーシティ研究の現状と課題」中国四国教育学会第 62 回大会、2010 年 11 月 20 日、香川大学。
- 2 藤本佳奈「地方私立大学入学者の進学理由」日本教育社会学会第 62 回大会、2010 年 9 月 25 日、関西大学。
- 3 藤本佳奈「地方大学における学生の学習・課外活動と進路意識の形成」日本高等教育学会第 13 回大会、2010 年 5 月 29 日、関西国際大学。
- 4 藤本佳奈「大学におけるキャリア支援の現状と課題」中国四国教育学会第 61 回大会、2009 年 11 月 28 日、島根大学。
- 5 山田浩之「ボーダーフリー大学における学生調査の意義と課題」日本教育社会学会第 61 回大会、2009 年 9 月 13 日、早稲田大学。
- 6 有本章、山田浩之、長谷川祐介、藤本佳奈、西本佳代「地方私立大学における学習行動と学習意識」日本教育社会学会第 61 回大会、2009 年 9 月 13 日、早稲田大学。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山田 浩之 (YAMADA HIROYUKI)

広島大学・大学院教育学研究科・准教授

研究者番号 : 60258324